

パトスの重要性

写真は「建築若手研究者の会」が1985年に足助で開催した夏の理論合宿「宮本憲一ゼミナール」の記録集である。

編集事務局を務められていた名工大の高橋博久先生から刊行後まもなく頂いた。久しぶりに読み、あらためて表題に注目した。今から31年前の宮本憲一先生の「肉声」が伝わってくるようだ。「不肖の弟子」としては、ここで語られている先生の言葉をもう一度しっかり心に刻みたい。



皆さんがたは研究者として、あるいは実践家として、ロゴスを持ち、エートスを持っていると思います。同時にやはり必要なことは、パトスだと思うのです。つまり、論理を持ち、倫理観あるいは社会的正義観を持つと同時に、情熱がなければいけないと思うのです。つまり、ものに対するセンシビリティというのが必要だと思うのです。公害の患者をみて、それに対して衝撃を受けないようになったら人間でないと思うのです。やはり、公害の患者を見たときに受ける衝動というものが、人間をしてその問題の分析に走らせ、その問題の解決に走らせていくわけです。その事実に対面して、素直に受ける衝動というものがどうしても必要で、それが鈍いと研究者としてもあるいは実践家としても、一人前になれるのではないかと思います。そこから生まれてくるパトス、情熱がなければ、研究というものは単なる職業になってしまうわけですし、そのパトスをどう育てるかというのが、その人の持っている人間性、あるいはセンスだと思うのです。

皆さんが現実につぶつかり、その中で受ける衝動を大事にして、その衝動をそのままにしないで、それをどういうふうにして自分の理論の中に体系化するか、あるいは、新しい理論を作り出す源泉にしていくかということ、学んでいけばいいと思っています。

それをどうやっていけばいいかということですが、私は、やるときは本格的、全面的にやれといたいわけです。やりたいと思ったときに、それをいい加減にやる時は駄目なのです。やりたいと思ったときには、そのテーマを本格的、全面的にやって欲しいわけです。その問題に関する古今東西の理論を読み上げてみせるとか、その問題に関する歴史を徹底的に分析してみせるといった、先ほど言った四つの局面（理論と歴史と現状分析と政策）を徹底的にやるということです。そうしないと、自信とか見通しとかいったものは身に付かないわけでありまして、つまり、腰を据えなければいけないわけですし、素直な感受性でもって受けたテーマを離さないということが大切なのではないでし

ようか。中途半端でなく、徹底的にやるということが必要です。

私がモットーにしているのは、もし壁にぶつかったときにはたじろがないということです。そうなったら、その問題について少し頭がおかしくなるぐらいになっても、徹底的に考えるということです。繰り返しくりかえし、何処が間違っているのか、どうして行き詰まっているのかを、考えるのです。人間というのはよくできているものでして、こうして頑張っていたら必ず問題を解決していくものだ、私は思っています。たじろがないで、駄目になりそうだと思っても、徹底的にその問題を考え抜けば必ず道は開ける、それが私がプロとして皆さんに贈る、唯一の言葉です。

(2016年6月25日)